

今月は3冊
です。

2008年 **1月のおすすりめ本**

高知県立図書館

「これで納得！よくわかる音楽用語のはなし」

関 孝弘、ラーゴ・マリアンジェラ／共著 全音楽譜出版社 2006年6月発行
2階一般開架図書（請求記号：760.4）

指揮者がオーケストラに指示を出す。「第2楽章アダージョ、オーボエのソロから。」指揮棒が上がる。楽団員の心が集まる。動きだすタクト。オーボエのソロ。たっぷりとしたテヌート。なめらかなレガート。ソロの終わりは、ややディミヌエンドしながらリタルダンドで……………。

クラシック熱が高まっていますね。これまでは高尚なイメージがあつて敬遠していた方も、最近では気軽に楽しんでいらっしゃるようです。CD レンタルショップにもクラシックのコーナーができていて驚きました。学生時代、部活動で6年間コントラバスに愛情を注いだ私としては、クラシックの話ができることがとてもうれしい。やはり、音大生を主人公にしたマンガやドラマがヒットしたことが大きいのでしょうか。

ところが、クラシックに触れる機会が増えるほどに、聞きなれない音楽用語に出くわすことになります。そのほとんどがイタリア語なのですが、「用語の意味なんて不要！」とおっしゃらずに、ぜひとも一歩踏みこんでください。そうすれば見えてくる新しい世界。では音楽辞典……………というものも肩がこりそう。そこでおすすめなのがこの一冊。イタリアの日常会話を使って音楽用語を分かりやすく、微妙なニュアンスまで教えてくれる本です。音楽の教科書で見た覚えのある、スタッカート、フェルマータ、ダ・カーポなどもあり、読むと目からウロコ、そして納得。曲をより深く味わえるはずですよ。

2008年は、名指揮者ヘルベルト・フォン・カラヤンの生誕100年。久しぶりにCDをひっぱりだして聴いてみようかと思ひます。

「しごとっち」

松永 真理／監修 幻冬舎 2005年12月発行
2階一般開架図書(ジョブコーナー)（請求記号：589.7）

先日、中学生に『仕事』について話をする機会がありました。それは、生徒たちに“仕事をする”のイメージをつかんでもらい、将来の仕事について考えるきっかけづくりを目的とした授業でした。そのポイントは、一仕事をするってどんなことなのか、仕事をするうえで大切なことは何か一課題発見力・問題解決力・交渉力・創造力・決断力……………これらは今、経営者や起業家だけではなく、職種や業種を問わず社会人であれば誰もが求められている大切な要素となっています。

では、こうした能力やチャレンジ精神「=起業家マインド」をもって自ら行動できる人はどんな風に仕事に取り組んでいるのだろうか……………。そこで、今回紹介する本書は、<社内起業家>を実践している、ある会社の社員についてのストーリーです。「ピンチはチャンス」「失敗してもやらないよりマシ」……………。これは、授業で生徒たちに伝えたメッセージでもありましたが、仕事は、自分の考え方によって楽しくすることができるということです。そのためにどのような姿勢で働いているのかが、エピソードを通じて伝わってきますので、これから就職される人、仕事が楽しくなる方法を見つけたい人には、参考になる一冊です。

「ルイジアナの青い空」

キンバリー・ウィリス・ホルト／著 河野 万里子／訳 白水社 2007年9月発行
1階子ども読書室（請求記号：93/ホル）

アメリカの南部ルイジアナ州の空は見たことはないが、きっと澄み切った美しい青空が広がっていることだろう。物語の舞台は、1957年の夏、ルイジアナ州の片田舎で、十二歳の少女タイガーは知的障害をもつ両親と働き手で愛情深い祖母と質素に暮らしている。しかし、祖母が急死し、あこがれの叔母から「都会で一緒に住もう」と誘われる。

華やかな都会や、別の自分へのあこがれ、両親を否定したい気持ちとそれと裏はらの心細さ、友だちとの関係など、思春期の多感な女の子の心の揺らぎと成長をルイジアナの青い空あたたかく繊細なまなざしで力強く描き出している。

情報が溢れ、人間関係が希薄に、でも複雑になってしまった今の時代に、家族の絆や友情、そして人としてのあり方といったことがまっすぐに伝わってくる。